
「美味しい食事を、致しましょう」

桜香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「美味しい食事を、致しましょう」

【Nコード】

N1124S

【作者名】

桜香

【あらすじ】

あるところに、5人の兄弟がいました。

5人は殺し屋さんでした。

そして、その兄弟は「人食者」というもので人間を食べることを生業とする血筋が流れていました。

その兄弟の長男はクラウスと言いました。弟妹思いのお兄さんです。その次は双子の兄妹でした。

二人は銀の髪に紅い瞳をもつ「アルビノ」でした。

男の青年はギルベルト。女の青年はユールヒエンといいました。

兄や弟妹の言動に頭を抱えている双子でした。

最後の二人も双子です。

クラウスと同じ金の髪に蒼い瞳をもつ子供です。

少年のほうをルートヴィツヒ。少女のほうをモニカ・ルイゼと言いました。

食べることには目のない、食欲旺盛な双子です。

5人は依頼を受けた「ネズミ」以外は食べません。

ですが。

対象となった「ネズミ」は容赦なく捕食されてしまうのです。

そんな5人は、とてもとても仲のいい兄弟でした。

とても とても

グチユリ、グチャリと、嫌な水音が辺りに響き渡る。

その音の主は、倒れている男と近くにいる少年から生み出されていた。

その側には青年が二人と少女が一人。

少女の方は指をくわえながら物欲しげに少年を見ていた。

青年たちはただ静かにそれを見ていた。

時折少年が軽く呼吸をする音と水音が聞こえる以外は、とても静かだ。

ジュルツと少年が何かを吸い取り、その頭を跳ねさせる。

それに伴い、水滴が幾つか宙を舞う。

少年は口元についた水滴を美味しそうに舐め取り、既に汚れている服の袖で口を拭う。

スツと立ち、後ろで傍観していた3人に向き直った。

そのうちの一人、銀髪で紅い瞳をもつ男にっこりと微笑んだ。

「兄さん、ご馳走様でした」

金の髪に蒼の瞳をもつ少年は、赤く汚れた顔でそう言った。

いや、少年の服も赤く汚れていたのだが。

銀髪の男は鬱蒼と笑って倒れている男を一瞥したあと、少年に向かって笑いかけた。

「食事が美味しかったようで、何よりだ」

グチユリ、グチャリと、嫌な水音が辺りに響き渡る。

その音の主は、倒れている男とその近くににいる少女から生み出されていた。

その側には青年が二人と少年が一人。

少年の方は顔や服が赤く汚れたまま、少女を見ていた。

青年たちはただ静かにそれを見ていた。

時折少女が軽く呼吸をする音と水音が聞こえる以外は、とても静かだ。

ジュルツと少女が何かを吸い取り、その頭を跳ねさせる。

それに伴い、水滴が幾つか宙を舞う。

少女は口元についた水滴を美味しそうに舐め取り、既に汚れていた服の袖で口を拭う。

スツと立ち、後ろで傍観していた3人に向き直った。

そのうちの一人、銀髪で紅い瞳をもつ女にっこりと微笑んだ。

「姉さま、ご馳走様でした」

金の髪に蒼の瞳をもつ少女は、液で汚れた顔でそう言った。

いや、少女の服も液で汚れていたのだが。

銀髪の女は鬱蒼と笑って倒れている男を一瞥したあと、少女に向かって笑いかけた。

「食事が美味しかったようで、何よりよ」

「ギルベルト、ユールヒェン」

数時間前。

長兄のクラウドと呼ばれた双子は、共に紺の軍服の様な物を身に纏った姿で立っていた。

ギルベルトのほうは短い髪に首元には黒縁の銀のクロス。服に隠れた肉体は筋肉が無駄なく、そして程よくついている。ユールヒエンのほうは背につくほどの髪に首元にはクロス。しなやかな女らしい体つきだが筋肉も程よくついている。

二人とも銀の髪に紅い瞳、白い肌をもつ言わば先天的アルビノだ。

「兄貴、どうかなさいましたか？」

ギルベルトがクラウドに尋ねた。

「仕事ですよね、兄さん」

ユールヒエンが答えを言った。

クラウドは一枚の紙をギルベルトに渡し、金色に輝く髪を手櫛で梳いた。

彼の、本題に入るときの癖だ。

金の髪に蒼の瞳をもつ二人の兄、クラウドはその瞳を細めた。黒い神父の装束を纏っているからか、酷く暗く見え威圧的だ。

「それが次のネズミだよ」

まるで子供に物を教えるような物言いだ、目はギロリと剥いている。

二人はその紙に貼られた小さい写真に、目を落とす。

短く刈り上がった燻った金髪に濁った瞳。

筋骨隆々の男の名の横には赤い×印。

ギルベルトは見下した目でそれを見て、ユールヒエンに渡した。

彼女は興味なさ気ながらも、一応は目を通す。

「ルッツやモニカも連れていけば良いか？」

ギルベルトは二人分の名前を出し、兄に了承を得ようとする。クラウスは苦い顔をして考え込んだ。

ユールヒェンも明後日の方向を向き、やはり考え込む。

ギルベルトが無理かと思ったときだった。

「・・・ルイー、それ私のだよ！」

「ルイゼばかりずるいよ！・・・」

廊下から、幼子の声が聞こえてきた。

双子が振り向き、兄が扉を見るために顔を上げたのと同時に、荒々しく扉は開いた。

「ルイゼはこの前アレを食べたじゃないか！」

「だから、その代わりに今度はルイーがアレを食べるんでしょう！？」

口論をしながら、金髪に蒼眼の双子が入って来る。

少年の方は白いシャツに紺のスキニージーンズを身に纏い、首からは黒縁の銀のクロスを下げている。

少女の方は同じ白いシャツに黒のフリルスカートを身に纏い、首からは同じクロスを下げている。

少年は短い髪、少女は少年よりも少し長い髪をしている。

「二人とも、何してるの！」

「だってルイゼが！」
「だってルイが！」

ユールヒエンが子供たちを仲裁するために間に立つと、二人は互いを指して互いを批判した。

思わずため息をついたユールヒエンを見て、クラウスが苦笑した。

「二人は何時も元気だねえ」

「兄貴、悠長に構えてる場合じゃねえよ・・・」

ギルベルトも、ユールヒエンと同じで疲れた顔をする。
クラウスは居住まいを正して小さな双子に向き直った。

「ルートヴィツヒ。モニカ・ルイゼ」

優しい声音で名を呼ばれた双子は長兄を前に姿勢を正した。

「兄上、すみません！」

「騒がしくしてごめんなさい！」

素直に騒いだ事に謝った二人に、クラウスは微笑むかけて何故口論していたのか訳を尋ねた。

すると、モニカが素早く答えた。

「ルイが、私のおやつを盗ったんです！」

「だってルイゼは、この前”あか”を食べたじゃないか！」

「ルイーだって、”なか”を食べたじゃない！」

再び始まった口論に、双子の兄妹は疲れきった表情だ。

クラウスは二人に口論を止めるように言い聞かせ、彼の話聞くように言う。

「そういえば、なぜ兄上たちは此处でお話をしているのですか？」

ルートヴィツヒが、尋ねる。

モニカもそれに賛同し、頷いた。

クラウスは先程のような威圧的な表情ではなく、それは優しい表情で二人に言う。

「ギルベルトやユールヒエンには伝えただけだね、今日はネズミ取りの仕事が入ったんだよ」

そう言えば、二人の顔から好奇の表情が零れた。

「本当ですか、兄上！」

「本当だよ、ルートヴィツヒ」

「私たちも行けるんですか!？」

「勿論だよ、モニカ・ルイゼ」

先程まで言い争っていた二人は、お互いに顔を見合わせた。

そうして、ニツと笑うと今度は取引を始める。

「ルイーはこの前”なか”を食べたから、今度は”あか”ね！」

「ルイゼは”なか”だね!じゃあ、それはルイゼが食べてよ！」

「ううん、一緒に食べようよ!ネズミさんより美味しそうだよ！」

「いいの?ありがとう、ルイゼ！」

二人はキヤイキヤイと騒ぎながら、楽しそうに話している。
ギルベルトとユールヒエンは息を吐きながら咳きあった。

「で、今度はどうする？」みず」か？」

「ゴメン、今それ考えられない」

そんな二人の隣で、小さな双子はとても嬉しそうにクラウドに話している。

「だからね、兄上・・・」

「ネズミさんは食べて良いんだよね!？」

「ふふ、このネズミさんの」なか」も美味しかったなあ」

「はは、”あか”も美味しかったよ。暫くは食べられないかなあ」

口元と服の袖を汚したままのモニカとルートヴィツヒは、倒れたままの男を見下ろしたままそんな会話をしていた。

モニカは髄液で、ルートヴィツヒは血液で汚れていた。

その様子を、ギルベルトとユールヒエンは少し離れたところで見ていた。

「アイツらは本当に臓器が好きだよなー」

「まあ、アタシらは液だけだね。あ、今回は血液を貰うわね」

どーぞ、とギルベルトは言い、そのまま天井を仰いだ。
兄弟5人で殺し屋をしている彼らは、人の形を取るものであり人ではなかった。

彼らは人を捕食する人食者。

双子の弟妹は臓器、特に心臓や脳を好んで食す。

ギルベルトとユールヒエン、彼ら二人は体液を好む。

そして彼らの兄であるクラウスは。

「兄さん、”てつ”は食べちゃ駄目なの？」

そう言っつて、ルートヴィツヒは男が倒れていた場所を指差した。

今、男の四肢はもがれて血も抜かれていた。

その血は全て、男の身体を抱き抱えながら口を胸元に押し付けている彼女によって全て吸い取られた。

久しぶりなのか、彼女は貪るように飲んでいた。

「駄目だぞ、ルッツ。それは兄貴の取り分だからな」

そう言っつと、彼は何処から取り出したのか小さな小動物の死骸をナイフで解体し始めた。

モニカもまだ食べ足りないのか、ナイフを手に死骸を解体していた。

死体の処理は、彼らの”食事”だ。

今回ギルベルトは男の骨髄を貰う。

だが体液であれば彼はなんでもいいのだ。

長兄のクラウスは皮膚や生殖器を除いた臓器が取り分だ。

残りの肉はそれぞれに振り分けられる。

殺し屋とは裏の世界でどれだけ息をひそめていても需要があるもので、彼らが飢えることは無かった。

それどころか、もう一人や二人くらい人食者がいてもいいのでは

ないかと思うほどだ。

「ギル」

ふと視線を下ろすと、片手に液体が入った瓶を持ったユールヒエンがこちらに来た。

唇にこびりついた血を舐め取り、ギルベルトに瓶を渡した。

「アンタも飲みたいでしょう？」

その中身はとうに知れてる。

ギルベルトはそれを受け取り、すっかり食されていた肉体を見た。身体が腐る前に、持ち帰らなければ。

「ルッツ、モニカ」

弟妹を呼ぶと、二人は走ってこちらにやってきた。

二人の口元や服はすっかり汚れ、手には元が見て取れない物体が握られていた。

「二人とも、後片付けをして。兄さんが待っているから、家に帰りましょう」

ユールヒエンが優しい眼差しでそういうと、二人は「Ja」と答えて散らかしたものを片付けに行った。

ギルベルトは男の四肢が無くなった身体をビニールの袋で包み、担いだ。

ユールヒエンはもぎ取った四肢を集めて身体とは別の袋に放り込み、手に持った。

「兄さん、後片付けしたよ」

「綺麗さっぱり！なあんにも残ってないよ！」

クスクスと楽しそうに笑う弟妹を労い、片割れに目で合図を送る。

「じゃあ、帰るか」

そう言って、ギルベルトは高く跳躍した。

ユールヒエン、ルートヴィツヒ、モニカとそれに続いた。

夜風を切って、4人は家路へと急いだ。

それまでに4人が居た場所には、血の跡一つ残ってはいなかった。暫くして太陽が昇り、メディアは行方不明の人一人を伝えていた。

そして。

「さあ、仕事だよ。」

今度のネズミは

これだよ

この、兄弟だ。

” フェリシアーノ・ヴァルガス ”

” ロヴィーノ・ヴァルガス ”

,

(後書き)

本文中に出てきた隠語をチヨイと解説。

ネズミ 捕食対象、依頼を受けた殺しの対象。

”あか” 心臓のこと。

”なか” 脳のこと。

”みず” 髄液のこと。

”てつ” 肝臓のこと

ちなみに、血液は”しお”です。

あ、イントネーションはS.iにね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1124s/>

「美味しい食事を、致しましょう」

2011年10月7日03時15分発行